

文化の風が吹くまちちくしの

文化薫道

◆其の五十七

地名から見える寺の情景
武蔵寺と大門

天拝山の麓に静かにたたずむ武蔵寺は、四季折々の姿で私たちの目を楽しませてくれます。

寺の周辺は、今では住宅地や公園が広がっていますが、地名をたどると、ひと昔前にはまた違った風景が広がっていたと考えられます。



「紙本著色武蔵寺縁起」第一幅（江戸時代中期の作）武蔵寺境内の様子

江戸時代の初めごろに貝原益軒が記した『筑前国続風土記』には次のような内容が書かれています。

「この武蔵寺は虎丸長者という者が造営し、昔は大きな寺で堂塔も多く、子院が七坊あったという。正法寺、善正寺、宗正寺、蓮花寺、地藏坊、石水坊、池上坊である。…大門のあった跡は塔原村にあり。今もこの地は大門という」

武蔵寺の敷地内には七つの付属するお寺（子院）があったと言われており、その範囲はかなり広がったと思われます。

そして大門とは、その漢字が表すとおり大きな門、正門のことです。今となっては、どこにあったのか分かりませんが、大門区のごとくに大きな門があったことがその地名から推測できます。

現在ではいくつかの行政区に分かれています。かつて天拝山東麓一帯は武蔵寺の広大な敷地だったのかもしれない。

問い合わせ先／文化財課

